

米国では高音質通話が売り物に 携帯IP電話「VoLTE」が商用段階へ

米国などを皮切りに携帯版IP電話「VoLTE」の導入が始まる。売り物は、高音質通話やメッセージ通信などの高度サービス。スカイプなどのOTTへの対抗策としても期待を集めている。

文◎藤井宏治 (IT通信ジャーナリスト)

LTEの音声対応の最終形となるIMS (IP Multimedia Subsystem) ベースのモバイルIP電話「VoLTE (Voice over LTE)」によるサービスが、いよいよスタートする。

先陣を切るのが、3GでCDMA 2000方式を採用している海外の3キャリアだ。①米国最大の携帯電話キャリアで2010年末にLTEサービスを開始したベライゾン・ワイヤレス、②同年9月にLTEを導入した米国第5位のメトロPCS、③昨年7月にLTEの展開を開始した韓国のLGUプラスが、2012年中にサービスを開始する見込みだ。

2013年には、米AT&Tや北欧のテリアソネラなど相当数の事業者がVoLTEの導入に踏み切ると見られている。日本でもNTTドコモが13年

にVoLTEを導入する計画と報じられおり、今年3月にLTEを導入したイー・アクセスも13~14年にサービスを開始する意向だ。

CDMA2000陣営が牽引

回線交換 (CS) 機能を持たないオールIPの通信システムであるLTEでは、本来、電話はVoIPで実現することが前提となっている。

しかし、LTEのサービスエリアが2G/3G並みに広がるのには時間がかかることなどから、過渡的なシステムとして「CSフォールバック (Circuit Switched Fall Back)」が開発され、ドコモのスマートフォンなどで用いられている。音声通信は3G網に委ね、端末がLTE網に接続されている場合は、通話時に回線を3G側に切り

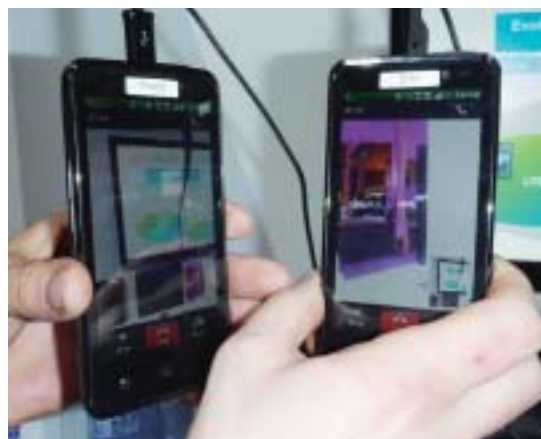
替えるものだ。

VoLTEは、このCSフォールバックの後継となるモバイルIP電話の標準規格である。欧米の携帯キャリアやベンダー12社により、LTE上での電話/SMSサービスの実現を目的に08年に設立された「One Voice イニシアティブ」の活動を継承する形で、2010年2月からモバイル通信の業界団体GSMAに設けられた「VoLTE イニシアティブ」で規格策定が進められている。

ここに来て携帯キャリアの間には、VoLTE導入の機運が高まってきたのには、大きく3つの要因がある。

1つは、CDMA2000事業者を中心とした「脱3G」の動きだ。

北米を中心に使われている3G規格のCDMA2000は、W-CDMA/HSPAに比べて導入キャリアが少ないため、今後ビジネス展開が難しくなることが懸念されている。そこで最大手ベライゾンを中心にLTEへの



Mobile World Congress 2012のエリクソンブースに出展されたVoLTE対応スマートフォンの試作端末。左がサムスン電子、右がLGエレクトロニクス製 (写真提供: エリクソン)